

枝幸町立枝幸南中学校

実施日：平成23年11月18日（金）9:50～10:40

講師：佐藤 徳一氏（択捉島出身）

皆さん本日は宜しくお願いたします。

私は択捉島留別村で生まれました。昭和14年4月29日生まれの72歳です。

(社)千島齒舞諸島居住者連盟網走支部に所属しており、一日も早く北方領土が返還されるよう、日々返還活動をしています。

北方領土で一番近い島は貝殻島です。根室からの距離はわずか3.7kmしか離れていません。私が生まれた択捉島留別村は根室から145kmくらいです。

島の人口は、齒舞諸島は5,281人、色丹島は人口1,038人、国後島は7,364人。私が生まれた択捉島は一番大きい島で、人口は3,608人住んでいました。この人口は昭和20年8月の発表されたもので、当時の日本人が住んでいたときの数字です。現在、北方領土には日本人は住んでいません。

私の住んでいた択捉島具谷というところは30戸くらいの世帯があり、150人くらいの方が住んでおり、皆で助けあって生活してきた。

島での産業は、主に水産業に従事する方が大半で、サケ・マス・海草類・カニ・貝類を捕って生活をしており、仕事が始まる夏場には、人手が不足東北方面から出稼ぎの人がたくさんやって来て、仕事を手伝ってもらっていました。私の家でも20人くらいの手稼ぎの方々が寝泊まりしながら、仕事を手伝ってもらっていたくらい、水産資源が豊富な島でした。また、花咲カニやタラバガニも捕れ、タラバガニは私たちには中々食べることはできず、全部缶詰工場に運ばれ加工された。

山菜も島ではたくさん採れ、ふきは子ども背丈くらい大きいのもあり、冬の保存食にして食べていました。他にジャガイモ、ダイコン、ニンジン、カブは畑で作って食べていました。山では野イチゴ、ハスカップなど採って食べるもの楽しみの一つでした。

終戦後の昭和20年8月26日、ソ連軍は突然択捉島に上陸してきました。

当時のソ連軍は、昭和20年8月9日、日ソ中立条約を破り、日本に宣戦布告。そのとき日本は8月15日に武装解除し、武器は全く無い状態でした。

私の家にもソ連軍の兵隊が来ました。その時は、女性はムロに隠れていており、その場は運良く何もなく済みました。その後の生活は、ロシア人と共住はなかったが、住んでいる村はソ連軍の通過点だったため、ロシア人は昼食時によく家にご飯を食べにきていた記憶がります。

同時期にアメリカ軍は、北海道に上陸し300人近くの軍隊を配置したため、ソ連軍は北海道へ上陸できなかった。もし、その時アメリカ軍の上陸がもう少し遅かったら、北海道の半分はロシア領になった可能性もあるかもしれない状況でした。

そんな状態が2年くらい続き、昭和22年9月頃、ソ連軍の兵隊が来て、「今日の昼頃に車が来るから引越しの準備をするように」と突然言われ、その数日後、ロシアの貨物船に乗せられて樺太まで連れていかれました。当時仕事で使っていた船や他の財産は、全てソ連軍に没収されました。

船内は荷物や人間の他に豚も30匹くらい居たので、船内はとにかく狭く感じました。

樺太に上陸してから、1ヶ月くらい樺太の「真岡」というところの兵舎に入れられ、その後北海道へ上陸しました。

現在、ロシアに不法占領されている北方領土は、日本固有の領土ですが、ロシアの統治下におかれロシア側が一步も譲らない状況が続いています。領土も大事だが、領土に伴い海域も変わり、それだけ魚などに捕れる区域も広がる。それだけ北方領土は私たちの生活に密接に関わってくる。それが日本の財産でもある。そうしたことも関係してくるので、領土問題は戦争で負けたから仕方ないなどの認識は捨ててほしい、北方領土は日本固有の領土であるのだから。



西興部村立西興部中学校

実施日：平成24年2月9日（木）13：15～14：05

講師：佐藤 徳一氏（択捉島出身）

ただいまご紹介のありました佐藤です。本日はよろしくお願いたします

私は択捉島留別村（るべつむら）で昭和14年4月29日に生まれ、今年で72歳となります。

昭和22年7月くらいに強制送還により、島を追われてきました。島を追われたとき、私は7歳で、私の祖父等を含めると択捉島には130年くらい住んでいました。

島を追われた数年間は、戦争で負けたので仕方ないことだと思っていたが、大人になり北方領土の歴史的経緯等を色々調べると、日本固有の領土だと確信した。そう感じたのは25歳くらいのときでした。

つい先日の2月7日は「北方領土の日」というのは皆さんご存じですか？1855年（安政元年）日魯通好条約で択捉島とウルップ島の間に国境線を定め、北方領土は日本の領土だと、国際的にも明らかにされた日です。

島の位置は、根室から一番近いところで貝殻島までわずか3.7km、一番遠い択捉島まで145kmくらい、北緯は稚内くらいに位置します。

島の大きさと当時の人口は、歯舞諸島は100km²、人口5,200人くらい、2番目に大きい国後島は1,500km²、人口は7,300人くらい、一番の大きい択捉島は3,200km²、人口は3,600人くらい、色丹島は250km²、人口は1,000人くらい住んでいました。

当時の択捉島の主な産業は、魚、海藻、昆布などの水産業でした。食料などの物資は函館、根室から船で輸送していた。太平洋側とオホーツク側の2つのルートがあり、オホーツクルートは国後島と択捉島の西側、太平洋ルートは歯舞群島、色丹島、択捉島の東側を、年2、3回くらい物資などを輸送していました。

また、昭和16年の真珠湾攻撃の際、択捉島の単冠湾（ひとかっぱわん）というところに日本連合艦隊を集め、ハワイに向けて攻撃した場所で、昭和16年11月20日ころからたくさん集まったようです。当時私は2歳くらいで記憶は無いのですが、海が夕焼けのように真っ赤になっていたようです。12月8日にはアツという間にいなくなったと母から聞かされました。

島にあった主な施設は、学校、郵便局、警察、無線所、発電所、駅舎、お寺、神社、病院などがありました。

当時の我が家の生活は、網元をやっており、仮に私が島に住んでいたら私が3代目を継いでいたと思います。祖父は私が産まれた昭和14年に亡くなり、当時父が2代目を継いで漁業を営んでいました。

私の一家は、祖母、父、母、姉2人、弟1人の7人で生活しており、住宅は細長い家で、真ん中が中庭となっており、そこに作業用として小川を通して、その小川で茶碗を洗ったり、洗濯などをしていました。飲み水は井戸を掘ったり、湧き水を利用して生活していました。また当時、家には5、6頭の馬を飼っていた。船などを引っ張るとき、荷物を引くときなど馬の力を利用して。当時馬が最大の原動力でした。

漁業を営んでいた私の家には、舳2艘、磯舟3艘、焼玉の発動機船10tくらいのものを2隻保有しており、毎年20～30人くらいの出稼ぎ者を雇っていたほど、択捉島は水産資源が豊富な島でした。

主に魚などを捕っていたが、カニもたくさん捕れて、タラバガニは缶詰用で島の加工場へ、私達が口にできたのは花咲ガニでした。

野菜類はフキ、ギョウジャニンニクは山でたくさん採れ、ダイコン、カブなどは自分達の畑で作っていた。

当時の島での遊びは、前浜で小さいツブを捕って、それを茹でて食べたり、山ではハスカップの実を採って

食べたり、イチゴや松の実などを採ってよく食べていた。島には店などがあまりなかったので、それらをよく食べて遊んでいました。

そんな平和な暮らしをしていたのですが、ソ連軍の侵略が始まったのは昭和20年の終戦後のことでした。択捉島が昭和20年8月28日、国後島が昭和20年9月4日、色丹島、歯舞諸島が昭和20年9月5日までに全ての島を占領しました。

私の住んでいた択捉島にソ連軍が上陸したときは、いきなり鉄砲を担いだ軍隊が土足で家に上がり入ってきました。そのとき、姉2人は家のム口にかくれていたため、運よく何もなく済んだ。

その後、引き揚げてくる昭和22年7月までの2年間くらいは、ソ連軍と一緒に過ごしていたが、私の住んでいた村では、特に問題はなかったが、他の島や村などではトラブルがあったと聞いています。歯舞諸島では事件が1件あり1名死亡、色丹島では3件あり3名死亡、重傷1名、国後島では4件あり3名死亡、択捉島では5件あり2名死亡、暴行3件。これはソ連からの報告で、実際はその何倍も被害はあったようでした。

ソ連軍との居住が2年続いた昭和22年7月の朝8時ごろ、突然今日引越しするよう命令があった。昼2時ごろに車が来るからそれに荷物を積むよう言われ、荷物は自分達が持てる程度だけとのことで、他の全ての財産はそのとき島を置き、ソ連軍に没収されました。

まず島民は、荷物と一緒にトラックに乗らされ、内保(ないぼ)という港に連れていかされた。そこには2、3日居た記憶あります。その後、ロシアの貨物船に乗せられ、樺太の真岡(まおか)というところに連れて行かれました。

船内では荷物と人間でぎゅうぎゅう詰めになれ、乗せられた島民の間では「樺太で殺されるのではないかと心配した人もたくさんいたようです。樺太での生活は、ブタ小屋のようなところに入れられ、1ヶ月くらいそこで過ごしました。その1ヶ月後、日本の船が迎えにきてくれて、引き揚げ者は「やっと生きられる」と実感したそうです。その船で函館に向かいましたが、当時の函館では、赤痢が流行しており上陸は28日間くらい延びてしまった。

その後、私達一家は親戚の居る青森県に行き、昭和23年4月に日高管内門別町に移住したが、そこで現実を間の当たりにすることとなりました。それは、お金が無く何も買うこともできなく、住むところもなく、ニワトリ小屋みたいなところに住むこととなったことです。択捉島での生活は裕福に過ごただけに引き揚げてからは生活が一変しました。お腹減らしても食べる物がなく、水を飲んで腹を満たすことも度々ありました。やっと普通の生活が出来るようになったのは、昭和26年くらいでした。

私が北方領土を大事にしていることは、島を追われて来たから、取り戻せと言うのではなく、北方領土は日本とロシアの話し合いの中決まった、国際法上でも明らかに日本の領土である北方領土をロシアが不法に占領したこと。また、北方領土の島はそれぞれ小さい島々だが、その領土によって領海も変わってくる。それが日本の財産にもなってくると言うことです。

